鍵のかけたハズの家にいたのはーー

冬馬(とうま)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鍵のかけたハズの家にいたのはーー

【Ｎコード】
Ｎ３２２５Ｚ

【作者名】
冬馬（とうま）

【あらすじ】
至って普通の社会人ー紙敷敏樹ーの家に突如現れた美少女。
その影に蠢く多くの者。
そして彼女の正体はーー。
本編を読めばすぐに分かってしまう（笑

ー出会いー（前書き）

色々とマズい場面を多くしたいと思っています。

Ｒ－１５で収まる様にして行くつもりですが、気まずくなる様な作品になって行きそうなので覚悟をしてください。

ー出会いー

ーある日、仕事から帰ってくると…。

美しいと言わざる得ない少女が玄関に佇んでいた…。

それも全裸で…。

「すみません！い、家を、ま、間違えました！！」

ドアを素早く閉め背をあてる。

（よく考えろ、俺！）

（…思えば俺はこのドアを鍵を使って開けたじゃないか！）

（そしら、どうして間違える！？）

（いやいや、そもそも鍵のかかってる部屋の中にはどうやって彼女は入ったんだ？？）

もう一度見てみたい。

そんな願望もあったかもしれない…が、俺はもう一度ドアを開けて彼女を見た。

腰まで伸びた真っ白な髪、真っ赤に染まった目、メロンのように整った豊かな胸。

「おかえり…と言うのが礼儀と…聞いている…だから、『おかえり』」

不覚にも、俺は身長差から生まれる上目遣いおその言葉にトキメキを感じてしまった。

ー出会いー（後書き）

度々気の向くままに書かせてもらってる冬馬といいます。

不定期に書いている為、中々先に進むことが出来なかったり、ネタを作ることが出来なかったりで困っている内に勉強で動きづらくなってしまいました…。

それでも書いて行こうと思いますが、なにとぞよろしくお願いします。

ーあいさつー

「た、ただいま……。え、えーっと…どちら様で？」

「…ロザリエ・ナイトメア…」

「こりゃあご丁寧にどうも…。俺、紙敷敏樹（かみしき としき）って言うんだ。と…取り敢えず、服…着てくれるか？　流石に…気まずい…」

タンスから男物で悪いけどそれしか無いので、割と新しめな服を一式彼女に渡す。

着替えが終わるまでそうは長くは無かったはずなのだが…。

理性を保つのに苦労した…。

「それで？　どうやってこの鍵の掛かった部屋に入ってきたんだ？」

着替えが終わったころを見計らって話しかけた。

「霧になって…」

「そうか、そうか。霧にな……って？？」

「そう……。…霧になって…」

（霧？　ミスト？　ＷＨＡＴ？）

（彼女はなにをいっているんだ？　）

「冗談か…何かか？」

「……違う…。だから、服がこの場に無い……」

俺は迷うことなく携帯電話を取り出した。

「…なにを……しようと…してるの？」

「なにって！　警察を呼ぶに決まってんだろ！」

「……め」

声が小さ過ぎた為に聞こえなかった。

「騒いでは…ダメ」

そう彼女はつぶやいたのだった。

しかし、既に遅かった。

電話はコールを終えて繋がってしまった……。

「はい、こちら……ザッ…ザッ…『お電話変わりました…。マルコ、と言います。只今からそちらに向かわせて頂きます故、以後、お見知りおきを……。紙敷敏樹様…』」

ー執事ー

「…だから『騒いでは…ダメ…』っと言ったのに…」

（今の電話なんかおかしくないか！？？）

（そもそも…なんで…なんで…）

「なんで俺の名前が言っても無いのに知られるんだ！？？」

「…マルコは…私の……」

しかし、彼女はそこまで言うと下を向いてしまう。

「『私の』なんなんだよ！」

そう叫んだ時、部屋のドアが開けられた。

鍵が掛かっていたハズなのに…。

「お迎えにあがりました…。ロザリエ・ナイトメアお嬢様…」

真っ白なオカッパ頭をもつ紳士服とも言えなくもない神秘的な服に身を包んだ男が入ってきた。

「ちょっと待て。その声は……さっきの電話に出てたマルコ…さんだよな…」

「然様でございます」

「じゃ、じゃあ…幾つか質問をしてもいいか？」

「無論構いません。幾らでも答えられる範囲なら答えます故、遠慮なさらずに…」

「では、お言葉に甘えて……。マルコさんの職業は？」

「執事…っと言ったところでしょうか…」

見た目からはそれらしい雰囲気は出ているためか、それを疑うことはしなかった。

「ドアはどうやって入ってきたんだ？　鍵がかかっていたハズなんだが…」

「鍵…ですか……。かかっていた様には感じませんでしたが…」

（感じなかった？　それはどういう…）

「普通の質問にしようか。マルコさんは料理出来るのか？」

「たしなむ程度になら…」

「それなら彼女にご飯を作ってやってくれないか？　ついでに、俺とマルコさんと……下にいるもう一人分も。さっきから彼女、元気がなさそうだったから」

「……承知しました。材料はそこに入っている物を勝手に使って

も？」

一瞬嫌な顔をしたのは気のせいじゃないだろう。

どうぞ。と言うと台所に立ち料理をして行くマルコさん。

たしなむ程度と言っておきながらも、その動きに無駄がなく材料も最低限しか使われなかった。

出来ました。

そう言ってリビングに持ってきたのはレストランで出される料理の様に盛り付けされた料理が４人分。

マルコさんが下にもう一人呼びに行っている間にご飯を並べる。

「こちら、運転手のレックと申します。ドライバーの腕は確かでありますが、少々無口なお方ですがよろしくお願いします」

男は帽子を被っており髪型はツンツンとしていて肩幅が広くとても大きな体をしていた。

こんばんは。

と声をかけると頷くだけで返事は返って来なかった。

確かに無口な人らしい。

席について料理を食べる。

「うまいな、たしなむ程度ってのはかなり過小評価過ぎやしないか？」

いえいえ。と手を振っるマルコさん。

「うちのコックはもっと美味しい料理を作りますよ…食材が良ければ…良いほどに……ね」

不意に眠気が俺を襲って来た。

終いには、マルコさんの話の途中で意識を失ってしまった。

ー執事ー（後書き）

テスト前に思いついたことを書いてしまおうw

みたいなノリで書かせていただいてます。

文章がへんかもしれませんが気づいたら直して行きます。

また、変な点がありましたらコメントで指摘して貰っても構いません。

むしろ、ダメだしとか、改善点とかくれると嬉しいです。

ー誤解ー

目が覚めるとフカフカのベットの上に倒れていた。

部屋を見回しても到底自分の部屋とは思えない。

（どこだ？　ここ…）

「お目覚めですか…残念です。あと五分したら食べることができたのに」

「食べる？　一体何をですか、　マルコさん」

不意にドアが開き、マルコさんが入ってくる。

「何を…ですか…。貴方は面白い事を言う…。貴方に決まっているじゃないですか、神敷敏樹さん」

その手には何もない。

しかし、明らかに普通とは違うものがマルコさんにはあった。

「な、なんなんですか…、そ、その牙…は…」

「これ…ですか…。ここまで来てわからないとは貴方は実に面白いものお方だ。ここで殺してしまうのはとても惜しい」

「だったら…」

「しかしながら、貴方はお嬢様の素肌を全て見てしまった！」

俺の言葉を遮る様に叫ぶ。

「故に、貴方を生かしておく訳には行かないのだよ！」

マルコさんはベットに飛び込み俺の腕や足を拘束する。

そして…。

「では…、さようなら…神し…」

「マルコ！！　それ以上神敷さんに近づくなら！　私は貴方を殺します！！」

「マルコ？　言いましたよね…。彼は全くと言って良いほどに悪くはないと…」

「はい」

「では、何故彼を殺そうとしたのですか？」

状況は急変した。

マルコさんに殺されそうになったその時、『お嬢様』と呼ばれる女の人が入ってくるなりマルコさんを土下座させて説教の様な事が始まったのだ。

「あ、あの～。状況がイマイチ理解出来ないのですが…」

勇気を出して説教の間に入って聞いてみる。

「悪かったわね、ビックリさせちゃって。ほら、マルコ。説明してあげなさい」

「はい、お嬢様。まずはナイトメア家にあるしきたりから説明いたします…」

そこからは簡単な話だった。

まず、婚約者以外には素肌の必要以上の露出が禁じられている事。

そのために俺の家での出来事で俺が必要以上の露出を目にしてしまった事がいけないらしいという事。

一番大事なのが…。

人間に見られた事…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3225z/

鍵のかけたハズの家にいたのはーー

2012年1月2日01時50分発行